

上杉謙信の越中進攻と松倉城攻略



越後・越中国境の境川と日本海（左：新潟県糸魚川市、右：富山県朝日町）

戦国後期の永禄12年（1569）8月、越後の上杉輝虎（後の謙信）^{※1}は、甲斐の武田信玄方に寝返った、越中国新川郡松倉城^{※2}（現魚津市鹿熊）に拠る椎名康胤を討つため、前年に引き続き軍勢を率いて越中に進攻した。

椎名氏は、越中の有力国人で、室町期以来新川郡守護代の地位にあったが、戦国中期の永正17年（1520）暮頃に、輝虎の父長尾為景が、越中守護の畠山尚順^{※3}から新川郡守護代職を付与されたため、それ以降は守護代長尾（上杉）氏の与党として配下に属し、新川郡の又守護代として、郡内の実質支配を担っていた。しかし、前年から信玄が使僧長延寺実了を密かに越中に侵入させ、康胤の武田方への招誘工作を重ねた結果、康胤がこれに応じ、上杉方から離反した。同年2月、そのことを知った輝虎は、早速松倉城攻略を敢行したのである。

上杉軍の松倉城包囲

永禄12年6月、武田信玄に対抗するため、相模の北条氏康^{※4}との間で、越相同盟を成立させた上杉輝虎（謙信）は、同年8月になって越中に進軍した。同

月20日、上杉軍は越後・越中国境の境川（現朝日町）を越えて新川郡に進撃し、所々に火を放って堀江荘付近（現滑川市域周辺）を占拠した。

翌21日、輝虎勢は石田（現黒部市内）に着陣して、人馬を休ませ、22日には、松倉城下の金山（現魚津市金山谷）に押し寄せ、同城を包囲し要害に陣取った。さらにその日の晩に、魚津と富山を結ぶ交通の要衝である新庄付近（現富山市新庄町）まで固めた。次いで23日の申刻（午後四時頃）になって、金山の根小屋（松倉の城下集落）に放火したため、椎名康胤が籠城する松倉城は、孤立無援の状態に追い込まれた。周辺の作毛も荒らされ、新川郡内は、上杉の来襲で状況が一変したとされる。

同年9月になって、北条氏康から輝虎に、籠城を続ける康胤を赦免して、武田方との戦いに向かわせてはとの提案もあったが、輝虎はこれを拒否している。さらに10月上旬には、神通川を越えて西へ進撃する上杉軍の隙を衝いて、松倉の椎名勢が、魚津城を攻撃することへの警戒を怠らないよう命じていた。

この頃、魚津城には、輝虎の寵臣である河田長親が、城将として占領地の統轄にあたり、同年9月には、輝虎に従い越中に出馬していた長親が、上杉家中

※1 越後守護代長尾為景の子「長尾景虎」。永禄4年（1561）関東管領上杉憲政の養子となり上杉家の家督を継ぎ、同年將軍足利義輝から一字を賜り「上杉輝虎」に改名。元亀元年（1570）法号を「不識庵謙信」と称し、「上杉謙信」を名乗る。
※2 松倉山（標高430m）山頂にある難攻不落の城。室町中期以降、椎名氏の居城となる。平地に支城の魚津城がある。
※3 足利將軍を補佐する管領家畠山氏の当主。河内、紀伊の守護を兼ね、越中は遊佐氏（射水郡）、神保氏（砺波郡、婦負郡）、椎名氏（新川郡）を守護代として統治した。
※4 相模国の戦国大名。上杉に対抗するため、甲斐武田、駿河今川と三国同盟を結んだが、武田信玄が南進して今川を攻めると、北条は武田との同盟を破棄し、上杉と越相同盟を結ぶ。

柿崎景家・山吉豊守兩名と連署で、新川郡森尻荘内（現上市町）における諸軍勢の濫妨狼藉を禁止する制札を発給していたのも知られた。

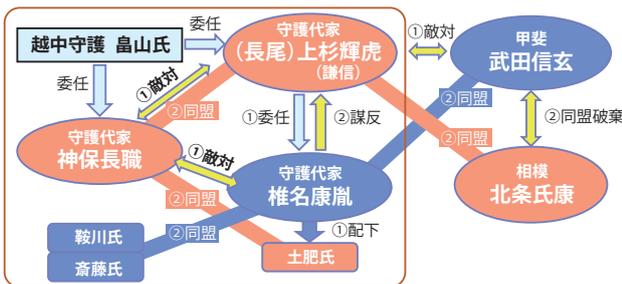
輝虎はその後、松倉城の陥落を待たず、10月27日の深夜に、越中の軍旅を終えて越後の春日山城（現上越市）に帰っている。椎名康胤の謀叛で、よんどころなく出馬した越中在陣が80日間の長期に及び、「軍兵ともに大変な労苦であった」と、輝虎は語っていた。

椎名康胤謀叛の背景

戦国中期の越中では、国人・土豪らの勢力伸張がみられ、それらの諸勢力が真宗本願寺派の有力寺院と結びつき、複雑な政治状況を生んでいた。そうしたなかで天文12年（1543）に、神保長職が神通川を東に越えて新川郡に進出し、富山城を築いた。これに対し同郡を勢力下に置く松倉城の椎名長常は、越後の長尾（上杉）氏と結んでそれに備え、神保氏との間で対立・抗争を深めることになる。

この抗争では、従来椎名氏の配下にあった新川郡の土肥氏が神保長職を支援し、神保氏と敵対関係にある婦負郡榎原保の斎藤氏や、土肥氏と所領紛争にあった射水郡の鞍川氏が椎名氏に加担するなど、越中を二分する「大乱」が起こっていた。しかしこの争乱は、同13年（1544）3月、隣国の能登守護畠山義総の仲介によって、椎名・神保両氏の和議が成立し落ち着く。

神保氏は、越中守護畠山氏の根本被官で、室町期以来、越中国射水・婦負両郡の守護代の地位にあり、射水郡



永禄12年の上杉輝虎越中侵攻図

放生津（現射水市新湊）を本拠とした有力国人であった。戦国前期の永正17年（1520）の神保慶宗の没落後、いったん勢威を失ったが、天文10年（1541）に父慶宗を滅ぼした長尾為景（輝虎の父）が死去すると、長職はこれを契機に勢力を回復し、椎名・上杉（長尾）両氏に対抗すべく、新川郡への進出をはかったのであった。

神保長職は永禄2年（1559）以降、椎名長常の甥の椎名康胤や、長尾氏の家督を継ぎ上杉氏の家名を継承した景虎（輝虎＝謙信）と抗争を続けることになる。連年にわたり輝虎の越中進攻に、越中の本願寺門徒（一向一揆）と結んで抗したが、永禄11年（1568）に至り、長職は一族間の内紛を契機に一向一揆方と手を切り、長年敵対してきた上杉輝虎と結ぶことになった。このことが長職への憎悪に燃える康胤をして、輝虎への不信感を生み、武田信玄の調略に応じて、武田氏・本願寺と気脈を通じ、上杉氏からの離反を招いたのである。

松倉城陥落と椎名氏の没落

松倉城の椎名康胤は、永禄12年の輝虎による攻略後も、越中の反上杉勢力の支援を得て、辛うじて命脈を保ったが、占領地の新川郡一帯は、魚津城に置かれた河田長親が領掌していた。

その後元亀4年（1573）正月になって、康胤が上杉方に降伏の意を示し、長尾顕景（謙信（輝虎）の養子、後の上杉景勝）を介して、謙信への取り成しを依頼したが容れられず、松倉城を明け渡した模様で、その後康胤の消息は絶たれた。

この結果、松倉城へは河田長親が魚津城から城代として移り住み、上杉氏支配地の新川郡の統轄にあたることになった。長親は、近江国守山（現滋賀県守山市）の出身で、永禄2年（1559）景虎（輝虎＝謙信）上洛の際に召し出され、越後に来住した武士とされる。性格は温厚で、智略に富み、輝虎の信任が厚かった。従って永禄12年の輝虎の越中進攻は、上杉領国となった越中国を、輝虎（謙信）が河田長親に支配を委ねることになる始まりでもあった。



松倉城跡（松倉山頂）から富山湾・能登半島を望む（魚津市）